



昭和24年。戦後悪化した食糧事情も落ちつきを取り戻すと、ビール産業もこの頃から消費が拡大し、ホップの国内自給が求められるようになりました。当時、白鷹町の主要産業と言え、水稲栽培と養蚕。どちらも生産・出荷しお金が入るまで時間を要したため、換金作物としてホップ栽培が注目されたのです。本町の気候がホップ栽培に適していたこともあり、その後は町内各地で次々とホップ組合が発足し、生産面積も瞬く間に増えました。

1960年代になると、ホップ栽培がピークを迎え、山形県は生産量が日本一となり、その中でも白鷹町は県下最大の生産地となりました。最盛期には約300人もの生産者がいたのです。

その後、生産者の高齢化や後継者不足、輸入される外国産ホップの影響で大きく衰退し、現在町内の生産者は6名ほどとなりましたが、今なお希少な国内ホップの栽培が続けられています。

お盆明けの8月半ば。萩野地区にある松田力男さんまつたぢきおのホップ畑では、町内の生産者が一堂に集まり、収穫作業を行っています。ホップ栽培は力仕事で、人手も必要となるので、収穫時は、生産者が協力しそれぞれのホップ畑を周りながら集団で収穫作業を行います。



松田さんは、中学校卒業後に父が育てていたホップ畑の後を継ぎ、この道一筋で今日までできました。「暑さが厳しい時期に、高所での作業は非常に大変ですよ。でも、楽しいと思える瞬間があるから今日まで続けてくることできました。今もこうやって、ホップを作っている仲間と集まって、冗談なんかを言い合いながら作業する時間も楽しいんです」と語る松田さん。ホップは天候の影響を受けやすい作物で、管理も非常に大変。今年も水不足の影響が懸念されましたが、それでも長年ともに作ってきた仲間たちと知恵を出し合い、支え合いながらその困難を乗り越え、立派なホップを作りあげました。

大事に受け継いできたこの“恵み”を
これからも仲間と支え合いながら守り続けたい。



— 特集 —

あなたの乾杯に しらたかの恵み

ホップ栽培の一大産地である山形県。白鷹町は、戦後まもなくして県下最大のホップ生産地となり、今もなお生産が続けられています。

近年ブームを巻き起こしている「クラフトビール」の影響で需要が高まっている「国産ホップ」。町内産のホップは、ほとんどが大手ビールメーカーとの契約栽培となっていますが、2023年について白鷹町で栽培されたホップのみを使用したクラフトビールが誕生しました。

自然豊かなこの地で育ったホップが再び注目され、新しい可能性を見出しながら広がりをを見せているのです。

